

## 生活事象に対する相違点を受けとめ合い 新たな見方や考え方をつくり出す

家庭科 中田 泉

### 1 家庭科における「考える子」

子どもは、着ることや食べることなど、人間の生活に欠かせない行為を毎日行っている。しかし、それらの行為があまりにも当たり前であるがゆえに、ほとんどの行為は無意識のうちに行われている。したがって、これまで無意識のうちに行われていた行為の意味や目的を、授業を通して初めて意識してとらえることになる。どうしてそのように考えるのか、なぜそのようなことをするのか、その考えに至った根拠は何かという問いをもち、友達とのかかわりを通して解決していこうとする。

子どもの見方や考え方は、ともに暮らす家族の価値観によるところが大きい。自分の生活の仕方が当たり前であり、違う生活の営みに気付く機会が少ない。生活事象に対する自分の見方や考え方と、友達の見方や考え方とを比べることで、自分の考えをふり返り、吟味し、考え直していく。そして、自分の考え方とは異なる友達の考えを受けとめ、自分の生活をよりよいものにするための考えへと深めていく。

以上のことから、家庭科における「考える子」を次のようにとらえる。

身近な生活事象から問いをもち 友達と交流しながら さまざまな観点から自分の生活を多面的に見直し よりよいものにしようとする子

### 2 問いがつながる家庭科の授業

自分や家族の生活を見つめることで、忙しい中での家族の工夫や知恵があることなどに気付いたり、生活行為の意味や目的に問いをもったりする。それらの問いを、友達と交流したり、実習したりすることで単なる気付きや疑問が精選され、自ら解決していきたい問いとなる。子どもの見方や考え方の共通点や相違点から、意外性や疑問を感じ、調べたり話し合ったりする。さまざまな交流をくり返すことによって、新たな問いが生み出される。

### 3 「問いがつながる授業」への手だて

#### (1) 考えの揺れを感じさせるような場を設定する

正解が一つではない課題を設定することで考えに揺れが生じると、その対象に対して興味・関心が高まり、こだわりや願いが生まれ、問いをもちやすくなる。いろいろな問いをもち、友達と交流して問いや考えをつなげ、複数の価値の中から自分の生活に合ったものを選択していく。また、考えの揺れを生じさせるような発問をすることで、自分の中で確立していた考え方に疑問をもち、友達からの問いとの関係を考え、よりよい生活をつくり出そうとしていく。

#### (2) 交流のあり方を工夫する

子どもは、考えの相違点から意外性や分からなさを感じることで、問いを生み出し、その問いについて調べたり、調べたことにもとづいて話し合ったりする。そこで、相違点を明確にできるよう交流する際の視点を共有させる。視点を共有することで、異なる見方や考え方がかかわり合い、新たな問いが生み出されていく。

#### (3) 共通の体験的活動を取り入れる

自分の考えが、自分の生活をよりよくするものになっているかを明らかにしたり、本当にそのような変化があるのかを確かめたりするために比較実験や試行の場を設定する。共通の体験を通して、自分で判断・選択・決定する場を設けることにより、実感を伴う知識・技能の習得につながり、自分の生活をよりよくしていこうとするための問いをもち、意欲を育んでいくと考える。

## 4 実践例

### (1) 考えの揺れを感じさせるような場を設定する

#### 6年生「見直そう 毎日の食事とリズム」の実践から

子どもにとって、食事や睡眠、入浴などの生活時間は、当たり前の生活行為であり、無意識に行われてきた。生活時間の使い方を平日と休日の2種類に分けて表に表した。ほとんどの子どもが食事に関する気付きをもっていた。朝食については、多くの子どもが毎日とっていると話しており、それらは家族によって提供されたものであるため、朝食の必要性やよさについてこれまで意識することはなかったと思われる。そこで、「朝食を食べることは体によい」と聞くが、本当に体にとって必要なかを課題として考えさせることにした。

まずは、調べたりする前に、<朝食は本当に必要か>という課題に対して、始めの考えを出し合った。必要だとする考えが多かったが、必要ではないとする考えや食べた方がよいけれど食べなくても構わないとする考えも予想以上に出てきた。知識として必要なものだと知っていた子どもにとって、必要ではないという考えを知り、その根拠を詳しく知りたいという思いがふくらんでいったようである。

それぞれが、朝食をとると、体の中でどのような働きが起こるのかを調べたり、自分の経験をもとに考えをまとめたりしていった。そして、全員が自分なりの根拠をもち、全体で話し合った(資料1)。

必要だと考える子どもは、脳、体、心の3つの視点からよさを出し合っていた。朝食の必要感をあまり感じられなかった子どもは、本当は必要だと思うし、食べた方がよいこともよくわかったが、時間がないから仕方がないと話した。すると、それを聞いていた別の子どもが、「朝食をとることだけを考えるのではなくて、生活リズムと合わせて考えていかなければいけない。」とまとめたり、「手軽に食べられるものや軽いものでもよいから食べることを習慣にしていけばよい。」とアドバイスしたりしていた。

朝食の大切さを必要かどうかから考えることで、問いが生まれ、考えが広がっていった。子どもは、「これまで何となく大切だと思っていたが、朝食を食べると頭の回転がアップし、体も元気に目覚め、満足感も得られるよさを知り、平日だけでなく、休日もしっかりと朝食をとりたいと思う。」とふり返りをしていた。

ふり返りを交流した中で、「朝食の大切さは分かった。では、どんなものを食べればよいの?」と子どもから問いが出された。そこで、朝食を食べるなら、<主食はごはんにするか、パンにするか>を課題として考えていくことにした。朝食を食べるよさが理解されたことで、ごはんとパンのどちらにすると問うことによって考えが揺れ、問いが生まれやすくなると感じ設定した。

ごはん派とパン派それぞれの考えを全体で話し合った(次ページ資料2)。ごはん、パンそれぞれによさがあるだけに、どちらにしたらよいという結論にはすぐにはたどり着けなかった。しかし、それぞれの考えを聞いているうちに、根拠が同じであっても結論が異なることが出てきた。

T : 朝食は本当に必要だと思いますか。
C 1 : 「ぼくは、必要だと思います。食べないとおなかが空しくし、イライラするから。集中力もなくなります。」
C 2 : 「そうだよ。勉強にも集中できないし、倒れてしまったり、病気になるよ。」
C 3 : 「朝食をとらなかつたことがあるけど、倒れなかつたよ。病気になるって、例えばどういうこと?」
C 2 : 「朝食をとらないと、糖尿病や肥満になる確率が高くなるらしいよ。」
C 4 : 「朝食を抜いて、2食にすると逆に太るということを知ったことがあるよ。」
C 5 : 「どうして太るの?」
C 6 : 「おなかが空いた状態で、昼食にドカ食いをしてしまうでしょ。それが全部体に蓄えられるんじゃない?」
C 3 : 「でも食欲がないから、起きてすぐに食べるのはきつい。」
C 7 : 「食べるとよいのは分かるけど、何を食べればよいの?」

資料1 朝食の必要性について問いから考えをつなげていく

そして、それを子どもが問うことで、考えの交流が必要感のあるものとなった。根拠として出て

- T : 朝食の主食はごはんにしますか、それともパンにしますか？  
C1 : 「腹持ちがよいからごはんがいいと思う。」  
C2 : 「よくかむと、脳の働きも活発になるしごはんの方がよいと思う。」  
C3 : 「和食は世界文化遺産にも登録されたから、伝統という意味でもごはんの方がよいと思います。」  
C4 : 「それにごはんは飽きないし、いろいろなものとの組み合わせができるからいいと思います。」  
C5 : 「パンもいろいろなアレンジができるし、飽きないと思うけど、どう？」  
C4 : 「でもごはんはおかずの組み合わせが何通りにもできると思います。」  
C6 : 「どちらでもよいのかな？」

資料2 朝食の主食について根拠に対する問いから考えをつなげていく話し合い

きたキーワードが、この後の朝食作りの要素へとつながっていった。ごはんとパンのどちらがよいということではなく、自分の大切にしたい要素を満たすためにはどちらがふさわしいかという視点で主食を選択していけばよいことを皆で確認した。

このように、問いが生まれて考えがつながっていく瞬間はあったが、考えに対する根拠が少なく、なかなか広がりが見られなかった。主食に限定せず、どのようなものを食べたらいいかという幅広い朝食のおかずについて考えていけば根拠も明確になったであろう。また、あらかじめ調べる時間をとった上で交流すれば、しっかりとした

根拠についての交流となり、問いに対していろいろな切り口で答えることができたのではないかと思う。

### 5年生「見つめよう 家庭生活」の実践から

野菜の名前や調理のしかたを知るだけでなく、これまで考えもしなかった視点から野菜を見ることで、野菜に対する関心が高まり、なぜ？ どうして？ といった疑問が出されて深まっていくと考えた。そこで、野菜の名前を確認した後に、それぞれの野菜が水に浮くか沈むかと発問した。

まず、ピーマンから予想した。ほとんどの子どもが、中が空いているから浮くと予想した。実際にやってみると予想通り浮いた。次にキャベツ、じゃがいも、きゅうり、さつまいもを予想し試してみた。このあたりまでは正解を予想する子どもが多かったが、この後の大根で予想は半々であった。やってみると沈むので、子どもは、「切ったら小さくなるから、浮くと思うよ。やってみよう。」「小さくなると浮くの？」「大きさは関係ないと思う。」「重さが軽くなると浮くんじゃないの？」と違った視点から野菜について考え始めた。実際に切ってみても大根は沈むので、ますます「どうして？」と疑問をもつようになった。そして、しだいに浮くものと沈むものの共通点を探し始めて、仮説を立て始めた。

「野菜のできる季節かな。」「色かな。」「野菜のでき方が関係しているのかもしれない。」「それってどういうこと？」とお互いの仮説に対して問いをもち始めた。「じゃがいもやさつまいも大根は、土の中でできているでしょ。でも、ピーマンやキャベツ、きゅうりは土の中ではなくて土の上でできるから。」「ということは、にんじんは沈むの？」「本当だ！にんじんは切っても沈むんだね。」「大きくて重いけど、かぼちゃは浮くということ？家でもやってみよう。」「と問いをつなげていった。

このように、友達の考えを聞きながら、問いをもち、それを投げかけることで自分の考えを確かなものにしていくことができた。そして、野菜のでき方に興味をもつ子どもも出てきた。

## (2) 交流のあり方を工夫する

### 6年生「見直そう 毎日の食事とリズム」の実践から

朝食作りの実習にあたって、朝食作りの要素を出し合って、栄養バランスを全員共通の要素として、そのほかに自分がこだわる要素を一つか二つ選択し、調理計画を立てることにした。

朝食作りの計画にあたっては、5年生時に学んだゆでる調理方法のほかに新たな調理方法であるいためる調理方法を取り入れることを条件とした。すると、やってみたことがないので、一人

でできるかとても不安だとの声が聞かれた。また、「朝食作りに野菜を使いたいと思う。でも、自分の要素にどの野菜が合うのかよく分からない。」という声も聞かれた。そこで、それぞれの野菜がどの要素に適しているかを中心にプレゼンを行い、自分がこだわる要素との関係について問いをもって聞くことができると考えた。

「もやしは、短時間でいためることができると分かったのですが、いっしょに組み合わせるとよい野菜は何かありませんか?」「短時間でできるということですが、実際にかかった時間はどのくらいですか?」「栄養のバランスを考えると、たんぱく質のものが足りないのを補いたいのですが、何かおすすめのものはありませんか?」など、自分の計画に生かすためにこだわりの要素からの問いをもっていた。担当した野菜のグループが、その野菜に合う食材を答えられない時には、他のグループの子どもが、経験などからおすすめを伝えていた。また、要素に合わないというプレゼンには、「切り方をうすくしたり、大きさをもう少し小さくそろえたりすると合うのでは?」と話していた。

交流後は、「いろどりを重視しているので、にんじんとピーマンを使ったいため物にしようと思う。」「短時間を重視しているので、もやしを使おうと思う。切らなくてもよいので、手間も省ける。おすすめしてもらったハムをいっしょにいためるとおいしそうだから、やってみようと思う。」とまとめていた。

このように、いろいろな野菜を要素という視点で話し合うことで、こだわりの要素に合う野菜かどうか、知りたい情報について問いをもつことができ、自分の計画に必要なものを選択していくことができたとと思われる。

### (3) 共通の体験的活動を取り入れる

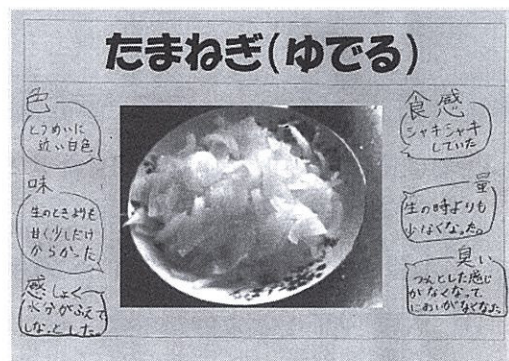
#### 5年生「見つめよう 家庭生活」の実践から

毎日野菜をどのくらい食べたらよいかを実際の生野菜の状態で見せると、野菜を苦手としている子どもは、「毎日これだけの量を食べるのは無理だよ。」と話した。すると、「そのままでは無理でも、調理したら食べられるよ。」という友達の声から、調理をしたらどのように変化するかを試してみることにした。

身近な野菜を、生とゆでた状態とでどのように変化するかを比較実験することにした。グループでゆでる野菜は異なるが、同じ観点で結果をまとめ、交流した(資料3)。グループで温野菜サラダを作る時に、どの野菜を使うか考えた。その際、同じ観点でまとめたことで、詳しく聞きたいことについての問いをもつことができた。「調理の時間はどのくらいかかりましたか?」「切り方がいろいろありますが、どれがおすすめですか?」など、温野菜サラダの実習に生かそうと問いをつなげる姿が見られた。

このように、必要感のある比較実験をしたことで、問いがつながり、課題に対して意欲的に取り組めた。実際のゆでた状態を見られるようにすると、さらに実感を伴ったのではないかと思われる。

このように、必要感のある比較実験をしたことで、問いがつながり、課題に対して意欲的に取り組めた。実際のゆでた状態を見られるようにすると、さらに実感を伴ったのではないかと思われる。



資料3 野菜の調理法による変化

## 5 今後に向けて

子どもが積極的に働きかけることで、問いが生まれ、つながっていく姿が見られたと感じた。そのためには、考えの揺れを感じさせる場を設定することは有効であったと思われる。

その一方、共通の体験的活動を取り入れ、交流のあり方をくふうしていくと問いが生まれる瞬間はあっても、そこからねらいに迫るつながりにまでは至っていないことがあった。もっと多くの問いが生まれ、自分の考えを見直す問いへと精選していくためには、考えに対して、多面的な見方ができるようにさらなる手だてを今後も講じていく必要がある。